

景観フォーラム

巻頭言

保守主義のバイブルとされ、峻厳な考察で有名な『フランス革命の考察』を著したイギリスの政治家エドモンド・バーク（1729-1797）なら、今回の日本の総選挙についてどのようにコメントするでしょうか。今回の選挙では、少し聞いてみたくなるような奇矯なことが多々垣間見られました。正々堂々と議論をする謹厳にして不正を見逃さなかった剛直な政治家であったバークは、そのために多くの政敵を持っていたといいます。バーク曰く「わが敵はわが見方である。」と。宣なるかなでしょう。

さて、“景観から考えるまちづくり”にとってコミュニティは切っても切れない関係にあります。コミュニティの中にあるばらばらなものをまとめる必要があります、そこには政治が働くことになります。多様な人々、多様な地域をどのようにそこに住む人々に満足いくようにまとめるか。そして、土着的（vernacular）なその土地固有な大切なものを見分ける必要があります。唯ただ、利害関係を整理するだけではありません。そのコミュニティがどこに向かうべきかの指針も考えなくてはなりません。まさに真つ当な政治活動が必要となります。

しかし、今回の総選挙のようにある地域にとっていいものが、国政にとっては良くないものになってしまいがちなことが多々生じ、またその反対も当然であり、これは小選挙区制の限界が露呈しているのではないのでしょうか。選挙区を回る候補者の姿を見ていると、まるで議論を拒絶し候補者名を絶叫する操り人形のようにです。景観から考えるまちづくり活動の目線からみると、それはまるで異星人の如しです。

日本の政治家がよく口にして、人口に膾炙している有名な言葉に「是々非々」があります。この意味は「良いことは良い、悪いことは悪いとするのが知だ。良いことを悪い。悪いことを良いとするのは愚だ。」ということらしいのですが、この意味を正確に理解して用いている政治家のなんと少ないことでしょうか。残念です。公共性を中心に据える“景観から考えるまちづくり”活動に参加して、一から訓練し直すべきではないのでしょうか。

NPO法人 日本景観フォーラム理事長 斉藤全彦

<日本景観フォーラム2016年度(平成28年度) 年間スケジュール>

*2016年度とは2016年4月1日⇒2017年3月31日のことです。

2016年

- 4月 8日（土）**景観セミナー**：2月19日（金）戸谷先生によるセミナーの第2回目 於JICA研究所
- 4月27日（水）第1回理事会・総会 於JICA研究所
- 6月22日（水）**景観セミナー**：土岐寛先生『日本人の景観認識と景観政策 前編』 於JICA 大会議室
- 7月 2日（土）**景観まちあるき**：（板橋区）
- 8月 夏休み（景観研究自由参加）
- 9月21日（水）**景観セミナー**：土岐寛先生『日本人の景観認識と景観政策 後篇』 於JICA 大会議室
- 10月15日（土）**景観まちあるき**：世田谷（御担当：東海林さん）
- 10月26日（水）第2回理事会 於JICA研究所
- 11月16日（水）**景観セミナー**：町並みの構造 講師高山さん 於未定
- 12月14日（水）忘年会

2017年

- 1月18日（水）**景観セミナー**：世界の自然保護の現状 （例：ミャンマーの景観） JICA
- 2月15日（水）2016年度：景観町づくり活動のまとめと来年度への提言 於未定
- 3月 春休み（運営委員会開催予定）



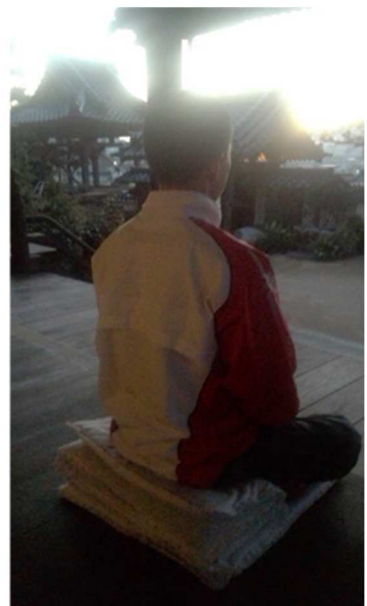
1964年東京オリンピック聖火最終ランナー 故 坂井義則さん 広島県世羅町「修善院」にて後進を見守る
(写真：ウィキペディアより)

トップアスリートたちを育む「世羅」の町と景観

標高350メートル前後、広島県の中央山間部に駅伝で知られる高原の町がある。早朝5時、アスリートたちが呼吸を整え、ウォーミングアップを始める。夜明けを告げる小鳥の声とジョギングの足音は朝の始まりの合図だ。ここに、昨年、全国高校駅伝で男女W優勝、「神の領域」といわれる最高記録を樹立した世羅高陸上部の若きアスリートたちが暮らす。実は、筆者はこの世羅高校の卒業生である。といっても高校時代は優秀な帰宅部生、朝に夕に陸上部員の厳しい練習風景を遠くに眺めながら隣町から通ったのだ。

あれから??年、幽玄清浄な気高き山中における修行で人間も神に近づいたり、悟りの境地に近づくことができるとする「神仙思想」について知ったのは、昨年、世羅高陸上部OBで長距離陸上界のアスリートたちを見守る臨済宗のお寺「修善院」の住職 神田敬州さんを初めて訪ねた時である。

そして、この「エネルギーに満ちた山中・空間」×「心地よい呼吸の生活」＝「高パフォーマンス」という方程式が成立する町が真にここ世羅だと悟った。朝、霧とも靄とも見分けがつかない幻想的な空気と光に包まれたなら、魂が最高に静寂と元気に満ちてくる。



母なる大地

さて、世羅の町は何故こんなにもエネルギーに満ちているのか。

歴史をたどろう。世羅は中国地方きっての穀倉地帯である。鎌倉時代、紀州高野山領大田荘として栄えたところだ。その中心であった「今高野山龍華寺」は世羅高校から約2キロ、弘法大師開基とされ、桜や紅葉がとても美しい。この世羅の大地は今も変わらず、



否、近年もっとたくさんの実りをもたらす大地へと成長している。息を飲むような美しい花畑や果樹園、ワイナリーなど、「世羅高原ブランド」として最近都会の人たちを惹きつけている。どこも素敵な風景だ。大地の至るところから元気がもらえる。こんな肝っ玉母さんのような大地を走るのはどんなに気持ちがいいことだろう。

町の人たちとアスリートたちが暮らす街

町の人たちは、みんな心暖かく気がいい。そう、大地と同じ肝っ玉母さんのような人が大勢だ。もちろん、若きアスリートたちを暖かく包み込む強力な応援団でもある。世羅の町では、若きアスリートたちと、町の人たち互いが元気の源であり、成長ドライバーである。実際に世羅高陸上部を中心に一つとなって活気づき町づくりに成功した町でもある。

若きアスリートたちが暮らす地域は洗練された都会の郊外の街の雰囲気を持っている。

町全体では少子高齢化が進む半面、前述の美しい農園や山々に囲まれたこの核となる地域はちょっとした新しいコンパクトシティの顔。並木が茂る美しい道路に面したナショナルチェーン店も町の彩りだ。大自然とモダニズムのコラボレーションが実にいい感じだ。アスリートたちはここを軽やかにジョギングしながら街の人たちと触れ合い、たまにはショッピングも楽しむのかなー？



クロカンコース



多くのトップアスリートたちが走った道。

この道は世界へと続く道。若きアスリートたちが毎日ここを走る。町の人たちが、そっと心を込めて道の手入れをしてくれている。だからこの道はいつもあたたかい。春の挨拶にと新緑が香り、夏は木々たちが日傘となって熱い陽射しから守ってくれる。秋には落ち葉が色々と話しかけてきて、冬が近づくと霜柱を踏む音がこの1年間目標とした季節の到来を告げる。

それにしてもこの美しい森の小道は、アップダウンがあって初心者にはキツイ・・・が楽しそうな道だ。

ゾーン

心身が一体、無我。

刹那の瞬間さえも超える無意識の集中。

「感じよ。」とは、この感覚をもって感じる ことなのか！

刹那さえも超える短い時間の出来事を感じて自在にコントロールする。この体験を知り、大海原で自分を信じる糧とする。これこそがトップを目指すアスリートたちにとって大切な体験、スキルだろう。

世羅の素敵な景観をもつ大自然に囲まれた環境はゾーンを体験するための最もいい環境に違いない・・・

何だか難しい話へとペンが走ってしまった。。。



近年、景観を楽しみながら走るマラソンが大人気だ。何もかも忘れて一心に走る。美しい景観は、ランナーに心地よいシャワーのように降り注ぎ、魂の扉をあけてくれる。美しい景観は、雑踏と喧騒から解放され、自己と向き合うことで心身と魂を一如へと誘導する無上のコスモスだ。

執筆 安川久美子



《付記》

左の写真は、あどけない表情ながら高校女子実力日本一の世羅高校3年・向井優香選手。

日本の長距離界を牽引する世羅の伝統は70年に渡り継承され続けています。

※本稿掲載の写真は、修善院 住職 神田敬州さん
(現役のランナー・陸上コーチ) より提供いただきました。
心より感謝申し上げます。

<LFJブックレビュー49>

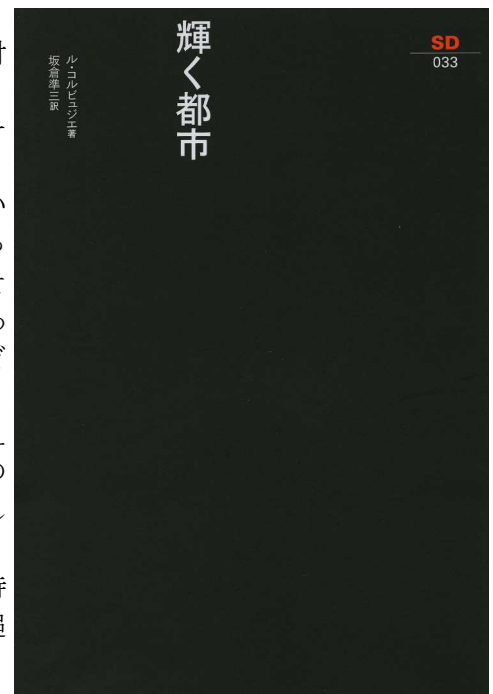
『輝く都市』ル・コルビュジエ著 板倉準三訳
1947年原著刊 1956年刊鹿島出版会

「本書はル・コルビュジエの『都市計画の考え方』（1947年パリ現代建築社）の日本語訳である。この書は彼の“輝く都市”理論の解説であり、また要約決定版である。」との訳者の説明書きがある。板倉準三はル・コルビュジエ（1887－1967）の直弟子であり、この翻訳書の書名を『輝く都市』としたのは、ル・コルビュジエの意図をより明確にしたものと思える。ル・コルビュジエといえば近代建築の三代巨匠の一人として人口に膾炙しているが、彼が画家でもあるということはあまり知られていないようである。本人は専門的な大学教育は受けていないようだが、却ってそのことが、建築にも美術にもより自由な飛躍が許されたのではないだろうか。

ル・コルビュジエの業績を見るのには越後島研一著『ル・コルビュジエを見る－20世紀最高の建築家、創造の軌跡』（中公新書2007年刊）などを参考にすると解りやすいが、副題にもあるとおり、その思い入れには気をつけなくてはならないだろう。彼の思想を簡略すると、本来の都市計画は人々に「生きる喜び」を齎すものでなくてはならない、というものである。「近代工業は、自分の居を据えた場所が間違っていたこと－その方向は正しかったにも拘らず間違っていたこと－を見出し、自分の周囲に多くの矛盾、逆説、恐るべき災いをもたらす異常、あるいは単に混乱を齎すだけの異常事態が発生しているのに気がついたのである」と指摘したル・コルビュジエは近代化が生んだ非人間的な工業化とその悪環境を嫌というほど見て来た。1920年「300万人の現代都市」では高層ビルを建設して空地（オープン・スペース）を確保し、街路を整備して自動車道と歩道を分離し（歩車分離）、それに基づき都市問題の解決を図ろうと提唱している。そして次のこの“輝く都市”では、「生きる喜び」という基本コンセプトを都市計画の中心に置き、そのために経済的価値、家族的価値、精神的価値というものをその追求の3本柱に据え置く。そして、“機械主義文明が齎す社会というものに対して、どのような都市が必要であるかを綿密に検討する。彼は、この社会の変化というものを、「時速4キロと、時速100キロという二つの相反する速度の共存」という言い方で現わす。時速4キロというのは人間の徒歩の速度であり時速100キロというのは自動車社会そのものを指す。自動車というものがなかった19世紀と違って、飛行機までを生んだ20世紀の都市社会はそれまでの人間社会構造を全く違うところに移行させるものであり、ル・コルビュジエの思想はそのような社会の都市計画はどのようにしなければならぬかに応えたものである。

ある面で、ル・コルビュジエの考え方を実現したように見えるのがニューヨークという都市かもしれないが、それはほんの一部であり、家族的価値、精神的価値の実現からは程遠い。しかし、ル・コルビュジエはB・ルドルフスキーの『人間のための街路』（1969年刊）が出た時はこの世の人ではなかった。時代は益々ル・コルビュジエの思い以上に、より精神的価値を追い求める状況になっていることに驚くのではないだろうか。

（斉藤全彦）



天地玄黄 ⑩「たばこと景観」

近頃、喫煙者について気になることが多い。

私は嫌煙家であるから余計に気になるのは当然だが、喫煙者のマナーが悪いのも確かだと感じている。煙草の煙の有害性については、いろいろな研究がなされ、一般の人にも知る事実である。健康を害するのはもちろん、周囲の空気まで汚している汚染物質の根源が、なぜなくなるのか。いくつか以下にあげてみた。

- ・大麻等の薬物と違い違法性がない。
- ・幻覚症状など生活に支障をきたす恐れが麻薬と比べ少ない。
- ・煙草による税収確保。
- ・昔からの趣向品である歴史

大方こんな理由だろうか。

後者の2点が強く煙草がなくなる理由として根強いのではないかと思う。

煙草がなくなることを嘆いていても進まない。

ここはひとつ、景観の観点から煙草について考えてみる。

喫煙所の設置されている景観は果していいものだろうか。駅前やコンビニの喫煙所では、外壁等で囲われているわけでもなくただ喫煙所の文字だけが掲げられた場所が多くある。

路面の一角に群がり有害な煙を吸い続けているだけでなく周囲にばらまいている。ひどい人は、平然と歩きたばこをして堂々とポイ捨てを行う喫煙者も見かける。

喫煙者が煙草を吸い続けて煙は止まることをしらない。



たばこの臭いも気になるが、景観の観点から、たばこの煙が漂っているということが問題になるのではないかと思う。

狭いスペースではあるが隔離された場所に喫煙所を見かけることもある。また、店舗やオフィスでも分煙化が進められ、多くの喫煙室が設置されている。一見、喫煙者にも非喫煙者にも優しいように思われるが、それはただの気のせいなのだ。喫煙室には換気扇があり、その排気は外にまき散らされていることをきずいてほしい。そして、喫煙所が増えるたびに景観が損なわれていくことを。

まだまだ、煙草に対して対応がされていない現状がある。隔離されていない喫煙所の煙をどうすべきなのか、喫煙所を増やすことによって景観が確実に損なわれていくことを。

喫煙者と非喫煙者、いかに折り合いをつけられるか。今後は景観の観点も加えて考えることも必要ではないだろうか。

(あきら)

〒150-0031

東京都渋谷区桜丘町14-5-502

TEL : 03(3780)3814

FAX : 03(6379)6681

E-mail : info@keikan-forum.com

URL : <http://www.keikan-forum.org>



Landscape Forum of Japan